

あかとう堂々

発行/飯綱町役場 企画課 地域振興係

Tel : 026 - 253 - 2511 FAX : 026 - 253 - 5055 E-mail : shinko@town.iizuna.nagano.jp

赤東未来創造プロジェクト 集落支援事務局<<赤東コミュニティ消防センター2F>>

携帯 : 080 - 7733 - 5627 E-mail : shurakushien@gmail.com

赤塩窯よ 甦れ!

九月十日、三水第二小学校の栗田喜美江校長先生による講話の時間で、赤塩焼を採り上げられました。

赤塩焼は、江戸末期から大正期にかけて盛んに製造され、その窯場は校門辺りにあり、全長一二、五mの七室からなる本格的な登り窯でした。

この日は、いづな歴史ふれあい館の小柳義男館長と小林栄十郎さん(赤塩焼創始者)の子孫である小林講和さんも招かれ、子供たちは、より深くより身近に赤塩焼の歴史に触れることができました。



赤塩尋常小学校校門の近くの窯場で

この時の窯は素焼き用。作治郎死後(昭和4年)手伝っていた人たちによって追悼製品が作られ、それを最後に取り壊された。

(「三水村の歩み」より)

赤塩焼の窯を築いたのは、瀬戸赤津の陶工・加藤栄十郎という人で、なぜ信州までやるばるやってきたのかわかっていません。確かなのは、赤塩毛野に移住し(一八六三)縁あって小林家の人となったという事です。その時、十歳になる息子がいて、連れ子として入籍しています。息子の名は作治郎といい、栄十郎亡き後赤塩焼を引き継ぎ、軌道に乗せていきま

赤塩焼はおもに、甕(かめ)や方口、すり鉢といった日用陶器でしたが、後に煉瓦、土管、大火鉢などの素焼き物が多く製造されていきます。

特に煉瓦づくりでは、旧信越線開通工事のための製造を請け負い、数十万個の煉瓦を作りました。そうしてはめこまれた煉瓦は、今も信濃町の戸草トンネルを支え続けています。



信濃町戸草のトンネル

力強く壁面を支える赤塩焼の煉瓦

赤塩焼は、町の有形文化財の一つです。赤塩という名のある通り、この地で生まれた文化遺産です。100%赤塩の土だけでは作れませんが、まぎれもなく地元の水を使用されて製造されています。陶業の地としての泉ヶ丘があったのです。



「赤塩焼の特徴は?」「なぜ無くなってしまったのか?」「この土を混ぜたのか?」「どのくらいの日数をかけてつくるのか?」「窯の値段は?」など、子供たちから沢山の質問が上がりました。さすがの小柳館長も答えに困る場面も。と言つのも、製法や栄十郎・作治郎父子について、未だわからないことが沢山あるからなのでしょう。

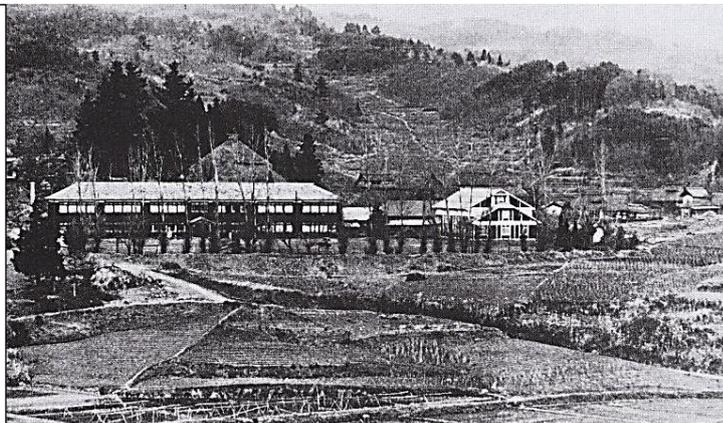
陶芸に関心があるなしに関係なく、子供たちに赤塩焼の存在を知って、その背景を想像してもらおう貴重な時間となりました。

あかどうこんじゃくものがたり

赤東今昔物語 ③

参考資料：「赤塩学校百年誌」「三水村の歩み」

ポプラの木立に囲まれた
三水第二国民学校（昭和十六年ころ）



戦時中は軍人のような先生がいてな
軍隊式で、そのやあ
厳しかった

だけでも
一人また一人と
出征して
いなくなつて
いったなあ

下赤塩に
斑尾川の一部を
せき止めて中二m
長さ五十mの
プールを作つて
泳いだことかな

マジ！

……学校は
楽しかった
ですか？

そうさなあ
楽しかった
事といえは

頭を使う勉強はだいたい
午前で終わつて
午後は田んぼや
畑を耕したりした
校庭の半分を
おこして大豆や
サツマイモ
土手に南瓜を
作つたりしたもんだ

校庭を畑に？
信じられなうい

やがて終戦をむかえて
昭和二十二年、新教育制度のもと
現在の三水第二小学校と改称し
平和と民主主義教育の実践へと
歩みはじめた

つづく



毛野少年隊の子供たち（昭和十四年）
大きな子も小さな子も
一緒に遊んだ兵隊ごっこ

勉強道具はもちろん
食べるものも
着るものもほとんど
なかった……

ご協力を お願いいたします

◎赤東地区住民アンケート調査の実施

このアンケートは、平成9年4月1日以前に生まれた方を対象に配布いたしました。これからの赤東地区の活性化に向けた将来構想の策定と、具体的なプランの取り組みに活用させていただきます。

回答については、今月末日までに提出いただきますようお願いします。

◎赤塩焼を探しています

赤塩焼の製品は、日用陶器を沢山焼いていたことから、多くの家庭で使用されていたと思われます。

物置や土蔵の隅などに、もしかすると赤塩焼の器があるかもしれません。それは赤塩焼の歴史を研究する上でとても貴重な資料となります。

心当たりがありましたら是非ご一報を！



あとがき

赤塩焼の歴史は泉ヶ丘の歴史になくはならないものです。未来永劫、語り続けたい偉業です。今後、赤塩焼の研究がさらに進み、再びこの地で赤塩窯が稼動することを願いたい。かつて五千人近い職工人が、煉瓦製造事業の際働いていたとのこと。その活気を呼び戻せる期待が、赤塩焼には充分あると思つたのです。